



TITLE:

研究会報告 筑波大学開学20周年記念 第2回『非平衡系の統計物理-現状と展望』シンポジウム(追加)

AUTHOR(S):

CITATION:

研究会報告 筑波大学開学20周年記念 第2回『非平衡系の統計物理-現状と展望』シンポジウム(追加). 物性研究 1994, 62(4): 485-485

ISSUE DATE:

1994-07-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/95360>

RIGHT:

研究会報告

筑波大学開学20周年記念

第2回

『非平衡系の統計物理—現状と展望』シンポジウム

(追加)

(1994年6月6日受理)

日時: 1993年11月10日(水)—12日(金)

場所: 筑波大学 大学会館 特別会議室

主催: 筑波大学物理学系

後援: つくば科学万博記念財団

内容: 昨年に引き続き、表題のシンポジウムを開催した。このシンポジウムは、非平衡統計物理の基礎的な部分(そのほとんどが、未解決)に関する研究が、統計物理学者ばかりでなく多くの物性での研究(高速緩和に纏わるもの、メゾやナノ・サイズのデバイスや器械の制作[そこでは、量子効果と散逸が共存し得る—巨視的量子系]に纏わるもの、乱流、高分子溶液やレオロジー等での non-Newtonian 粘性下での dynamics, プラズマ, その他)はもとより、素粒子や原子核、宇宙物理など幅広い層の物理学研究者、さらに数学、化学、工学研究者を取り込んで、新しい phase に入りつつある昨今の国際的研究状況を見るにつけ、やや立ち遅れの感のある国内水準を向上・維持することを目的に開催するものである。

今回は、『確率過程と統計物理学—その基礎と応用—』を主題に選んだ。それは、最近、量子系(非可換演算子)の確率過程の問題が、物理学者や数学者の間で盛んに研究され、ようやくその全体像が浮き彫りにされ始めた時期だからである。この問題は、学術的な興味にとどまらず、工学における回路、光通信等(学習、情報伝達などに関連して)の問題としても発展している。また、物性ばかりでなく素粒子や原子核、宇宙論の問題にも、確率過程の方法が純理論的あるいは数値実験として多く利用されている。このような時期に、当シンポジウムに於いて、この主題を取上げ情報交換を行うことは時宜にかなっており、また必要かつ重要なことであると考え企画したものである。

国内から多くの active な研究者が参加し、活発な質疑応答がかわされ交流を深めたことに加え、今回は、第2ローマ大学の数学者 Accardi 氏が飛び入りの形で講演をされ、たいへん充実したシンポジウムとなった。

(文責: 有光敏彦)

(注) この報告は、「物性研究」 Vol.62 No.1 (4月号) に掲載された研究会報告の追加掲載分です。